

レポート

## 第12回金融教育に関する 小論文・実践報告コンクール表彰式

昨年12月25日、第12回金融教育に関する小論文・実践報告コンクール（主催：金融広報中央委員会、後援：金融庁、文部科学省、日本銀行）の表彰式が金融広報中央委員会の事務局がある日本銀行本店で開催されました。表彰式の模様をレポートするとともに受賞作品の概要をご紹介します。



### コンクールの概要

募集部門	小論文部門、実践報告部門、研究校部門（今回新設）
応募資格	幼稚園教諭、小学校・中学校・高等学校・高等専門学校・高等専修学校教員、教職課程在籍または教職を目指す大学生、大学院生、大学教員等研究者
賞	<ul style="list-style-type: none"> <li>小論文部門・実践報告部門 特賞 …… 1編（賞状・賞金 30 万円）、優秀賞 …… 各部門2編（賞状・賞金 10 万円）、奨励賞 …… 各部門3編<sup>※</sup>（賞状・賞金 3 万円）</li> <li>研究校部門 推奨実践事例賞 …… 1～2編<sup>※</sup>（賞状・賞金 5 万円）</li> </ul>

※第12回では奨励賞に各部門2編を、推奨実践事例賞に3編を選定



講評を行う  
東京大学大学院  
松島 斉教授

「金融教育に関する小論文・実践報告コンクール」は、金融教育の必要性を広く世の中に認識していただくこと、さらに優秀な入賞作品を紹介することにより、金融教育に携わる方の今後の参考としていただくことを目的としています。

表彰式では金融広報中央委員会の吉國眞一会長から特賞、優秀賞、推奨実践事例賞を受賞された皆さんに賞状と賞金が授与されました。続いて審査員を代表して松島斉東京大学大学院教授から、「今回も多様な問題意識にもとづく多くの作品が寄せられました。全体としては、今までみられなかった分野、とくに工夫を凝らした教育実践が顕著にみられました。非常に興味深くかつ示唆に富んだ内容が多く、審査はとても充実したものでした。今後、受賞作品が広く取り上げられ、金融教育の機運がよりいっそう高まることを願っています」と講評をいただきました（各受賞作品への講評は次頁以降に紹介しています）。

◎受賞名  
特賞

◎作品タイトル

高齢者への金融教育講座における留意点  
—講座の実践をとおして—

◎受賞者

鹿児島大学教育学部4年 中野直実氏  
鹿児島大学准教授 田村愛架氏



写真左：鹿児島大学教育学部4年 中野直実氏  
写真右：鹿児島大学准教授 田村愛架氏

この論文のポイント

・高齢者のための金融教育講座を考案すること、その講座の実践をとおして、受講対象者としての高齢者への理解を深めるとともに高齢者への金融教育講座を行う際の留意点を提示する。

・具体的には、「還付金詐欺」を題材として、「詐欺に遭ったときの対処法を身につける」、「詐欺に遭わないための知識を身につける」、「学んだことを家族や友人に伝える」ことを目標とした講座を考案。

・さらに、この講座の実践をとおして、高齢者向けの講座では「替え歌」が有用であること、「悪いのはだました人であること」を明確に伝えること、「高齢者は講座の内容を家族や友人に伝える意欲が高いこと」といった高齢者像と高齢者向けの金融教育講座を行う際の留意点を提示する。

受賞者の声

振り込め詐欺などの消費者トラブルで最も被害が多い高

齢者を対象とすることで、社会に役立つ論文に取り組みました。

単に話を受け身で聞くだけの講座ではなく、考え、話し合う時間を持てる参加型で身につく講座をめざしました。

卒業後は小学校教諭になるため、小学校でも金融教育に取り組んでいきたいと思っています（中野氏）。

私たちの取り組みは公民館で行われる「高齢者サロン」に出向く出前講座で、金融教育であると同時に学生と高齢者の世代間交流という側面もあり、非常に喜ばれています。今回の受賞により、こうした私たちの実践が世に広がってほしいと思っています（田村氏）。

審査員の講評

本小論文は、高齢者の金融リテラシー向上という、わが国の重要な課題に真摯に取り組み、実践による検証を経て有益な提案を多数行っている点が高く評価されました。

◎受賞名  
小論文部門・優秀賞

◎作品タイトル  
データ分析(回帰分析)を用いた経済金融教育  
◎受賞者  
東京都立拝島高等学校教諭  
竹達 健頭氏

この論文のポイント

・データ分析(回帰分析)という統計的な手法を用いて経済金融教育を行うことの有用性を提言する。  
・経済教育において重要な意味を持つデータ解析について、株価や為替レート・国債等のさまざまな経済的なパラメータの相関関係を、パソコンの表計算ソフトを使った回帰分析という形で高校生に分かりやすく教える実践方法を紹介する。

受賞者の声

卒業生から「先生、確定拠出年金って何？」と問われ、生徒たちが社会に出る前に経済や金融の知識を実感できる授業にしたいと考えました。  
例えば円安やODAが実際の経済にどんな影響を与えているかを知るために、実際のデータ



を使って回帰分析を実施。一次データを採って入力するところから始めました。一次関数を使うため、数字や数学が苦手な生徒には厳しい面もありましたが、「円安で企業の株価が上がリ、金融緩和策に効果があった」、「ODAはベトナムの経済成長に寄与している」ということが実際に分析結果から読み取れ、「なるほど」と理解できたのは、とても重要な体験です。  
今後、年金など将来に関わることも自分で検証できる授業を手がけたいですね。

審査員の講評

高校生が生のデータベースを使い、自分で判断して見ていくという、とても重要な教育プログラムの実践です。現代社会や経済問題についての理解を深めるうえで、きわめて有意義であると評価されました。

◎受賞名  
小論文部門・優秀賞

◎作品タイトル  
これからの時代に求められる金融教育  
「起業による「金融教育プログラム」学校における金融教育の年齢層別目標」(年齢層別の金融教育内容「改訂版」)の実践的活用  
◎受賞者  
徳島県阿南市立山口小学校教頭 島村 孝氏

この論文のポイント

・筆者が過去13年にわたって取り組んだ金融教育を総括した論文。  
・小学校における金銭・金融教育では、社会に出ても通用する金銭感覚を身につけることが大切である。

・そのためには、疑似体験や教科ごとの分散的な金銭教育ではなく、「起業活動」を伴う授業を必修とし、子どもたちの記憶と記録に残る起業による会社経営を母体とした系統的な授業展開の必要性を説く。

受賞者の声

次期学習指導要領では、社会に開かれた教育課程やアクティブラーニングが重視されています。それを最も効率的に実践するには、子ども自身が実際にものに触れ、ものを扱っている人



から影響を受け、社会という風に当たり、学びとつたものを地域や社会に還元することが必要です。そして、それを最後までやり遂げる活動が一番身につくことを、私は何度も経験してきました。

小論文では、私自身の経験を踏まえた大きなフレームを示しました。そこにそれぞれの地域性や子どもたちの個性、先生方の得意分野を反映させ、それぞれの教育現場で起業の取り組みが広がっていけば、何よりもうれしいですね。

審査員の講評

小学校における社会とのつながりの中でのパラエティに富んだ体験的な学習が、試行錯誤の過程や児童の成長という大きな成果とともに紹介されています。次期学習指導要領の改訂に向けても時宜を得た作品であると評価されました。

◎受賞名  
実践報告部門・優秀賞

◎作品タイトル  
税の使い方から考えるわたしたちの  
暮らしと未来のまちづくり

◎受賞者

北陸先端科学技術大学院大学助教  
小林 重人氏

この論文のポイント

- ・中学生を対象に行った租税教育の実践報告。
- ・生徒が税と暮らしの関わりをより具体的に理解できるように、地元自治体の歳入・歳出を取り扱って授業を展開した。
- ・普段馴染みのない歳出にかかる用語については、筆者が開発したカードゲームによって確認させたうえで、生徒には一次資料である予算書をグループで紐解きつつ、課題に取り組ませた。

受賞者の声

税金は私たちの日々の暮らしに直結しており、社会に出る前の早い段階で税金の使われ方を知ることが大切です。そこで、これまで成人を対象に実施した「税金はどこへいった？」税金の行き先がわかるウェブサイトをみんなで作ろう」という



ワークショップを、中学生用にアレンジしました。

実際に納税額を計算した生徒たちは「税金は高い」と感じたようです。また歳出面の分析を行ったところ、公債費に注目するグループが多く、借金はのちの自分たちが返さなければならぬことを実感していたことが印象的でした。

自分の住むまちについて一層理解を深め、税金の使い方は自分たちで決めることができること、また主体的に地域づくりについて考える機会になればと考えています。

審査員の講評

税と暮らしは直結しているため、中学生のように早い段階で税の使い方について考える機会を設けることを提唱し、分かりやすい教材を使い中学生の主体的な学びを引き出している点が評価されました。

◎受賞名  
実践報告部門・優秀賞

◎作品タイトル  
大学における金融リテラシー教育  
アクティブラーニングと学習ポートフォリオ

◎受賞者

金沢大学専任講師  
松浦 義昭氏

この論文のポイント

- ・「金融リテラシー・マップ」を活用して行われた大学における金融リテラシー教育の実践報告。
- ・全16回の授業は金融広報アドバイザーと大学教員が分担し、アクティブラーニングを取り入れる形で授業方法の統一を図った。具体的には、授業前半では、金融リテラシー・マップの内容を踏まえた解説を行い、後半では実際の生活場面を想定したケース教材を用いてグループ討議や発表を行った。
- ・また、金融リテラシー・マップに対応した予習復習用のワークブック等の教材も開発。

受賞者の声

大学に入学すると、生活費を自分で管理するなどお金とかわる機会が増えてきます。また、大学生は社会人としての自立し



た人生プランを描いて準備する時期でもありません。そこで、実際に生きていくうえで役に立つ人生とお金に関する知恵が身につく授業にしたいと考えました。

毎週、授業後半に金融リテラシーを活用する場面を想定したグループ討議を行っています。が、「金利の差はわずかでも、長期では返済額が大きく変わることが確かめられた」、「自分が理解できる金融商品しか購入しない」、「リスクとリターンの関係が実感できた」といった感想が寄せられています。

今後も金融広報アドバイザーと連携した授業を展開し、確かな金融リテラシーを身につけた学生を育てていこうと考えています。

審査員の講評

金融教育の趣旨や内容を十分に理解し、体系的な教育内容とワークシートを含めた具体的な指導方法を提示している点で、有益な実践報告と評価されました。

◎受賞名  
研究校部門・推奨実践事例賞

◎作品タイトル  
地域を通じた体験的な学びから、社会的自立を目指した金融教育の実践（定時制高校から見えたこと）

◎受賞者

岡山県倉敷市立精思高等学校・金融教育委員会  
同校教諭  
小津野純・安藤裕子・田辺大蔵・芦田亮介・矢吹志郎氏

この論文のポイント

・定時制高校における社会貢献活動やフィールドワークを通じ、生徒の金融・経済の知識やスキル、コミュニケーション力の向上という成果を上げた金融教育の実践報告。

・2013年度から2カ年間、研究校として委嘱を受けたことをきっかけに、「地域を巻きこみ、生徒と社会が関わっていける金融教育」をテーマに実践。文化祭における「お金」をテーマにした作品展示、チャリティバザー、公開授業・講演会をはじめ、各学年で体験型授業にも取り組んだ。

受賞者の声

私どもの高校は全校生徒約100名。小さいながらも動きやすいのが利点です。

チャリティバザーを「持続型社会形成をめざす社会貢献」と



小津野 純氏

位置づけ、地元企業、東京の企業約200社に協力を仰ぎ、約3000点・22万円の売上を達成しました。

さまざまな実践を通じて生徒のモチベーションが高まり、14、15年度と連続して「エコノミクス甲子園」岡山大会で優勝できたほか、地域ボランティアへの参加や、社会のため友達のために貢献しようという生徒が増えたことを実感しています。

今後も継続して確かな金融知識を持った生徒を育てていこうと考えています。

審査員の講評

社会人としての人格の成長を重視し、生徒たちがコミュニケーション力を高めるとともに、近視眼的な生活スタイルを見直して貯蓄し、将来のライフスタイルをデザインして生活するように金融教育を実践しているとして評価されました。

◎受賞名  
研究校部門・推奨実践事例賞

◎作品タイトル  
商業教育の視点に立った金融教育の取組  
A/L型授業の実践  
（奨学金の返還と滞納の問題を考える）

◎受賞者

愛媛県立大洲高等学校教諭  
仙波鉄也氏

この論文のポイント

・奨学金の返還と滞納問題を考えるアクティブラーニング型の授業の実践報告。

生徒には、奨学金の完済までに10年以上要することを学んだうえで、自身のライフイベント、キヤッシュフロー表を作成させた。そのうえで、長期間にわたる奨学金の返還がライフプランに与える影響を、生徒自身が認識し、自立した消費者としての理解を深める内容とした。

受賞者の声

生徒から「奨学金は借金なのか？」と質問されたことをきっかけに、奨学金を教材とした金融教育が有効だと考えました。その際に、企業の立場から金融教育を考える場面を設定することに心掛けました。

最初は収入と支出の金銭感覚



くらし塾 きんゆう塾 〈2016年春号〉

審査員の講評

も十分ではなく、ライフプランの作成には苦労しました。ただ、グループワークで意見を出し合うと、計画を立てて借りる、使途を考えて支出する、必要以上は借りないなど、お金に対する意識が高まっていきました。

生徒たちからは、給与天引きなどで必要な貯蓄分を先に別口座に移しておく「先取り貯蓄」の知識は役に立つといった感想が多く寄せられ、手応えを感じました。

今後は商業科だけでなくほかの教科や学年団とも連携し、より深みと奥行きのある授業を展開したいと考えています。

奨学金の返済は、現在、学生が社会に入る入口で最初に出会う切実な問題となっており、これを含めてライフプランニングを考えさせるという実践に真正面から取り組んでいることに大きな意味合いがあるとの評価を得ました。

◎受賞名  
研究校部門・推奨実践事例賞  
◎作品タイトル  
小学校における職業体験学習の実効性を探る  
〜「私たちのハローワーク」働くことへの価値を見  
つけよう!〜の実践を通して  
◎受賞者  
福岡県八女市立矢部小学校教諭  
廣田 知良氏

この論文のポイント

・小学校6年生の総合的な学習の時間の中で、地元の複数の事業所の協力を得て行った職場体験学習の実践報告。

・職業体験は、2回に分けて行う計画で、事業所には一人一人の「勤務評価」の作成を依頼した。子どもたちは、1回目の職業体験後に行った自己評価と事業所から受け取った勤務評価を踏まえて、2回目の職業体験に臨んだ。

・今回の実践の結果から、小学校においても職場見学ではなく、職業体験という形でのキャリア教育は可能であり、その実効性は高いと分析する。

受賞者の声

事業所の方には、小学生でも「交流」ではなく「職業体験」という趣旨でお願いしました。手やからだを動かす物理的な作業



審査員の講評

が多かったものの、子どもたちは大人と同じ仕事を体験できなかった。勤務評価では理由も明確に書いていただいたため、子どもたちは自己評価とのギャップにショックを受けつつも、良かった点、良くなかった点をきちんと理解できたようでした。指摘された課題を解決しようとする前向きな姿勢、もつと世の中を知りたいという意欲など、目に見えて大きな成長を感じました。仕事は簡単ではないこと、夢をかなえるには努力が必要なこととを、実体験を通じて考え、掴んだ実践だったと思います。

中学校では全国で広く行われている職場体験ですが、小学校での実践は珍しく、先生方の苦労が忍ばれるとともに、綿密な指導により成果を上げていくことが伝わってくるとして高く評価されました。

ここで紹介した上位入賞作品の全文は、「知るぽるとホームページ」<http://www.shiruporuto.jp/teach/school/kyoin2015/> でご覧いただけます

年々レベルアップする提言・報告に期待を寄せて

金融広報中央委員会会長 吉國 眞一



金融教育は子どもたちをはじめとする人々の生きる力、すなわち、自ら学び、考え、主体的に判断、行動し、より良く問題を解決する力を養ううえで、大きな役割を果たしています。今回の第12回コンクールの全作品を拝見し、丁寧な実践を通じて考察されたもの、新たな視点による意欲的な実践など、金融教育が質・量の両面で着実に発展していること

が確認でき大変うれしく思っています。

さらに来年も教育関係者の皆さまから、さまざまな視点での提言やご意見、金融教育の実践に関するご報告をお寄せいただき、この表彰を通じて、その成果が多くのの方々間で共有されることを願ってやみません。皆さまからの積極的なご応募をお待ち申し上げます。

第12回 最終審査員

- 大杉昭英 国立教育政策研究所初等中等教育研究部長
- 神山久美 山梨大学大学院准教授
- 河野公子 聖徳大学大学院講師
- 松島 斉 東京大学大学院教授
- 向山行雄 帝京大学大学院教授
- 井上勝弘 NHK制作局第1制作センター経済・社会情報番組部長
- 高橋経一 日本銀行情報サービス局長
- 吉國眞一 金融広報中央委員会会長



表彰式の様子

\*次回、第13回「金融教育に関する小論文・実践報告コンクール」は、2016年6月ごろ募集開始予定です。